

# 地域と学ど

山形大学地域教育文化学部

大学でスポーツを学ぶというのは、どういうことでしょうか。

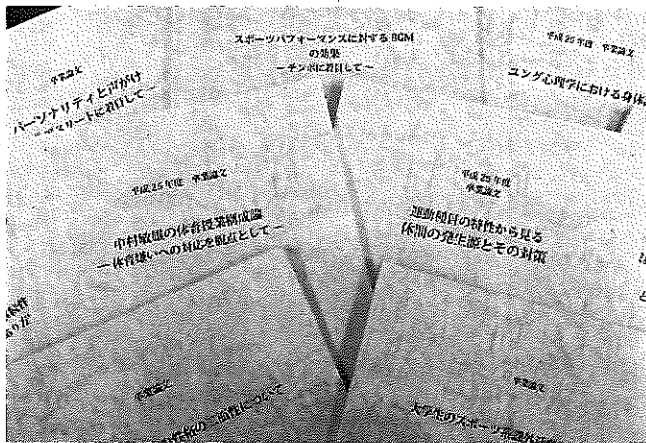
私たちのスポーツへの関わり方は、本来的にかなり多様です。オリンピックやワールドカップなどはスポーツ活動の花形として脚光を浴びますが、その背景には多くの人々の支援があります。また、これとまったく関わらない、日常の楽しみなどとして行われるスポーツ活動もあります。このうちどのスポーツ活動が正しいか、といった問いはナンセンスでしょう。いずれの活動も、現在のスポーツが持つさまざまな側面です。

私たちは、スポーツという営みを先人から受け継ぎ、今を楽しみ、後進へと

## 体育哲学 佐々木 究 准教授



▽1977年生まれ、岩手県出身。山形大着任は2010年。



卒業論文  
学生たちの主体的な研究をまとめた

# 学生の柔軟な発想に期待

受け継ぐこととしています。私の考えですが、大学でスポーツを学ぶということは、この多様な営みを支える人材を養成することにほかなりません。スポーツ活動を支援し、スポーツという営みをより豊かにより良いものにしていく。そのためには多くの学びが必要で、本学では学びの集大成として卒業研究が課されています。私はテーマの選定を学生の主体性に委ねていますが、その発想力にはいつも目を瞠（みは）る思いです。例えば、スポーツ選手が特定のプレーの前に行う習慣化された行動である「ルーティン」や「シンクス（縁起担ぎ）」に注目するもの。また、プロ・アマ問わずスポーツ選手には必

ず訪れる「引退」をその人の人生の一部として捉え直すといったものもあります。どれも一見するとスポーツ活動に本質的ではないように感じて、しかしどれも人間の営みとして切り離しがたい事柄です。持参しているテーマが毎度あまりに予想外なので、私の指導は苦心の連続ですが、彼らの知性と柔軟な発想が地域におけるスポーツという営みを今後どのように切り拓（ひら）いていくか、楽しみでなりません。

11月1回掲載します